

【ポスター発表】

当事者主体を目指した知的障害者生涯学習支援事業の課題

ー参加者のニーズに着目してー

○淑徳大学短期大学部 樋田 幸恵 (5531)

打浪 文子 (淑徳大学短期大学部・7714)

キーワード：オープンカレッジ・知的障害・当事者主体

1. 研究目的

知的障害者向け生涯学習は、2000年前後より注目が集まっている。特に、大学をフィールドとした知的障害者向け生涯学習支援事業は、継続的なオープンカレッジなど、全国的にも意欲的な実践事例が多く見られる¹。これらの実践内容については様々な先行研究があり、例えば、オープンカレッジについては、保護者の「学習機会と学習場所の確保」「他者との交流」といったニーズも明らかにされている（岡野ら 2010）²。しかし、参加する知的障害当事者の視点は十分に検討されていないという批判がある（西村 2014）³。

そこで本報告では、社会福祉士・保育者養成校である A 大学短期大学部における知的障害者生涯学習支援事業の実践を事例として、参加者である知的障害当事者及び家族の生涯学習に対するニーズを明らかにすることを目的とする。その結果を踏まえ、当事者主体を志向する知的障害者生涯学習支援事業のあり方及び今後の課題について考察する。

2. 研究の視点および方法

A 大学短期大学部ボランティアセンターでは、B 区在住・在勤の知的障害児者を対象とした知的障害者生涯学習支援事業を 2006 年度より実施している。2011 年度までは「パソコン教室」「おしゃれ教室」（C 社会教育会館との共催）等の「レクリエーション重視型」であったが⁴、2012 年から内容を変更し、当事者主体性を参加者全員が理解することを目的に、自己表現をテーマにした当事者主体的プログラムである「一日大学体験」（以下、大学体験と称す）を実施している⁵。本報告では、①2013 年 2 月、②2014 年 6 月、③2015 年 2 月に実施した大学体験の参加者である 16 歳から 50 歳までの知的障害当事者及びその保護者を対象に、留め置き調査法によるアンケート調査を実施した。アンケートの内容は選択式（今後の活動への希望）⁶、及び自由記述（今日の活動を振り返っての感想）であった。回答者数は①当事者 14 名・保護者 5 名、②当事者 13 名・保護者 5 名、③当事者 21 名・保護者 14 名であった。アンケートの回収率は全ての回において 100%であった。自由記述欄はテキスト化し KJ 法にて分類した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に従う。当事者及び保護者には、得られた回答は統計的に処理を行い個人が特定できないよう配慮することを伝え、同意を得ている。

4. 研究結果

当事者の今後の活動への希望では、「音楽」47.9%「身体を動かすこと」35.4%「美術・造形」31.3%「PCや携帯電話の使い方」29.2%「障害について知る」8.3%であった。また、保護者の今後の活動への希望は、「音楽」33.3%「美術・造形」33.3%「身体を動かすこと」25.0%「PCや携帯電話の使い方」20.8%「障害について知る」12.5%であった。

自由記述は「自己表現への評価」「運営者に対する意見・感想」「活動内容の感想」「今後への期待」の4カテゴリーに分類された。当事者・保護者の記述共に同カテゴリーが抽出されたが、特に当事者については「活動内容への感想」「今後への期待」に関する記述が多く、特に「楽しさ」や「満足感」について記述する傾向が見られた。一方、保護者は「運営者に対する感想」で「学生への期待」に関する記述が、「活動内容への感想」では当事者全般への自己表現への肯定的評価の記述が多い傾向が見られた。

5. 考察

当事者及び保護者の大学体験への「今後への希望」は順位・傾向共に共通性が高い。「美術・造形」の割合のみ当事者・保護者に差異が見られるが、これは②③の回の大学体験の内容が美術・造形体験であったため、すなわち当事者に体験済みであったためと考えられる。これより、今後の大学体験には内容の新規性が求められていることが示唆される。また、大学体験で目的とした「当事者主体性の理解」や障害に関する啓発については、今後への期待は少数であった。この点についてはプログラムにおける当事者主体性のあり方自体を再検討する必要があるといえる⁷。

自由記述では、当事者事者は活動内容への「楽しさ」や「満足感」及び継続的な開催への期待が多いことから、余暇支援として新規性のあるプログラム展開を検討する必要があるといえる。また、保護者は、学生への交流への期待感など先行研究（岡野ら2010）と一致する点が見られたことから、保護者のニーズとしてコミュニケーションや学生との交流を重視したプログラムの検討が求められているといえる。一方で、少数ながら当事者・保護者共に自己表現への肯定的な評価もみられたことから、本プログラムが目的とした自己表現への達成感や充実感を重視することも肝要であると示唆される。

¹ 建部久美子・安原佳子（2001）『知的障害者と生涯教育の保障 オープンカレッジの成立と展開』 明石書店

² 岡野智・鈴木恵太・野崎義和・川住隆一・田中真理（2010）「オープンカレッジにおける知的障害者の生涯学習支援に関する意義-受講生の家族へのインタビューを通して-」『教育ネットワークセンター年報』第10号（東北大学大学院教育学研究科）

³ 西村愛（2014）『社会は障害のある人たちに何を期待しているか』 あいり出版 p.81

⁴ 西村（2014）同上 p.66-67

⁵ 本事業の実践内容については、日本社会福祉学会第62回秋季大会（2014年）（No.PA-32）で報告した。

⁶ その他にも「（活動内容で）一番楽しかったこと」について選択式の設問に含めていたが、その部分についての考察は日本社会福祉学会第62回秋季大会（2014年）に用いている。今回報告するのは未使用部である。

⁷ 大学体験では、「社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会編（2013）『みんなで知る見るプログラム』社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会」を参照にしている。